

## お詫びと訂正

主の御名を賛美します。日頃はディボーションガイド『マナ』をご愛読くださり、心から感謝申し上げます。この度、6月号P.124(6月23日)の解説「偶像への供え物」の部分が不適切な内容でしたので、下記に変更させていただき、衷心よりお詫び申し上げます。以後、このようなことのないよう注意いたしますので、今後ともよろしく願い申し上げます。

\* \* \* \*

パウロはここで、その偶像にささげられた肉についてどのように考えるべきかを、コリントの教会の人たちの持つ知識と、自由と、他の信者たちへの愛による配慮を関係づけて語っています。この世には「唯一の神以外には神は存在しない」(4節)し、「すべてのものはこの神から出ており…すべてのものはこの主によって存在」(6節)するのですから、たとえ、偶像にささげた肉であっても、それを単に食物として食べることはかまわないわけです。しかしその知識を、回心したクリスチャンすべてが持っているわけではありません。だから、自分たちには食べる自由と権利があると主張するなら、まだ長年の習慣や考えから抜け出せないでいる「弱い人」たちのつまずきにならないよう配慮すべきであると指摘しています。さらに、「私たちが神に近づけるのは食物ではありません」から、確信を持って食べたとしても、「益にはなりません」と語っているのです(8節)。

これらのことばの根底には、だれかが自分の信仰の弱さや、人の評価を気にして信仰から遠のいてしまうなら、キリスト者の知識や権利はまったく意味がなく、むしろ弊害となるという彼の宣教への姿勢があります。そのうえでパウロは、10節以降でそのことによって起こりえることがらと、彼自身の考えと決意を明らかにしています。

2010年6月8日

いのちのことば社『マナ』編集部